これからの季節にサシバエ対策！～大切な牛を病気やストレスから守りましょう～

令和６年11月に国内で初めて、「届出伝染病」に指定されているランピースキン病が確認されました。ランピースキン病はウイルスによって引き起こされる牛の伝染病で、発熱、乳量の低下、皮膚の結節等の症状が認められます。主にサシバエ（写真１）等の吸血昆虫を介して拡大するといわれています。

サシバエは牛伝染性リンパ腫等の他の病気も媒介するほか、牛に吸血によるストレスを与えることで、増体や乳量の減少などの生産性の低下を引き起こしたり、農場現場にかかわる皆さんを刺す場合もあります。

今回は、サシバエの生態と併せて有効な防除対策をご紹介します。

① サシバエの生態

サシバエは、日本全国に分布する吸血性のハエで、アブなどと異なり雌雄ともに吸血します。牛舎でよく発生するイエバエと似ていますが、サシバエの成虫は吸血するのに適した細長い針状の口吻をもっています。サシバエの成虫は朝と夕方は牛舎内に移動し吸血しますが、それ以外の日中は牛舎周りの草むらや樹木などの風通しの良い場所に潜んでいます。

また、サシバエの幼虫は、動物の糞に多く生息し、特に繊維質の入った糞、牛や豚の糞を好みます。

② サシバエの防除対策

成虫のサシバエは全体の20％であり、残り80％は卵～さなぎの状態です。幼虫と成虫対策の両方を行うことが大切です。

幼虫対策は、まず、「堆肥・敷料・残餌をしっかり管理すること」です。堆肥を切り返すときは、隅々まで徹底し、堆肥発酵時の中心温度が65℃になることを確認しましょう。また、牛床は清潔に保ち、汚れた敷料や残餌は片づけましょう。

写真１　サシバエの成虫

写真２　防虫ネット

次に「ＩＧＲ剤の使用」です。ＩＧＲ剤は糞の取り残しがあるところ、子牛のいる牛床などに散布します。また、つなぎ牛舎ではバーンクリーナーに散布することも有効です。

成虫対策は、まず「殺虫剤の使用」です。系統が異なる殺虫剤をローテーションして使用することが大切です。また、殺虫剤を使用する際は、濃度と噴霧量が適切なことを確認し、サシバエが飛ぶ高さより上を狙って噴霧することが有効です。

次に、「防虫ネット、ひも状粘着テープの設置などの物理的防除」です。サシバエは主に膝くらいの高さ（30 cm程度）から２m程度の高さを飛翔しますので、その高さに絞って、子牛のいる場所やサシバエが畜舎の内外を行き来していると思われる箇所に、防虫ネットを設置することが有効です（写真２）。また、サシバエはひも状のものに好んでとまるという特性があるため、ひも状の粘着テープの設置も有効です。

今回は、サシバエの生態と有効な防除方法を紹介しました。暖かくなってくるこれからの季節、農場内のサシバエ対策を意識してみてはいかがでしょうか。

サシバエ対策について、個別の相談も承りますので、いつでも普及指導課までご連絡ください。（０４６-２３８-４０５６）